

都市型大学キャンパスに建つ建築作品の周辺環境との接続関係にみる現代日本の建築家の領域的思考

Design Theme on University Campus Facilities by Contemporary Japanese Architects
from a point of view of Spatial Relationship between Urban Campus and its Surroundings

奥山研究室 11M30196 佐野 亮 (SANO, Ryo)

Keywords：大学施設、現代日本の建築家、都市の境界
university campus facility, contemporary Japanese architect, edge of city

1. 序

1-1. 研究の背景と目的 近年、大学は社会に対して積極的な関係をもつことが求められており、公開講座の実施や大学施設の開放など、周辺地域への様々な取り組みが行われている。このような状況を背景に、高密度な都市環境に立地する大学キャンパスにおいて、その周辺の都市との境界部に建つ建築作品では、広大な敷地をもつキャンパスと都市との関係を調整することが重要なテーマになっているといえる。建築家はその設計論において、大学内の建物や広場との関係や、外部の道路や駅との関係を述べており、自身の建築と周辺環境との接続のさせ方とともに、大学の内外を意識した領域的なコンセプトを提示している。こうした内容からは、住宅地や商業地などといった様々なエリアをもつ都市空間のエッジに関する建築家の領域的な思考が読み取れる。そこで本研究では、都市型大学キャンパス¹⁾の周縁部に建つ建築作品²⁾を資料とし、その設計論から周辺環境との接続に関する設計意図と、接続関係が示される対象を検討することで、建築家の領域的思考の一端を明らかにすることを目的とする。

1-2. 資料対象の概要

資料とした建築作品には、大学の顔となる正門付近に立地して都市に直接面するものや、プロムナードを介して都市に間接的に面するものがある。こうした各資料の立地の性格を、ここでは特に都市への開放性という観点から、都市からの人の往来の可否について検討したところ、人の往来が可能なものが大半を占め(116/180)、その中には広場に面するものもみられた(図2)。これらのうち、その設計論において周辺環境との接続に関する思考が読み取れる全129作品を以降の分析の対象とした。

2. 接続対象

本章ではまず、設計論の中で周辺のどのような要素に対して接続関係を述べているかを検討する。分析例(図1)では、「分節されたボリュームを統合する底による水平線によって、駅前広場からの人の流れを構内へ迎え入れる新たなゲートとして位置づけられ、開放的な建物の構成とあいまって、地域・社会に開かれた大学のイメージを形成すると考えた。」といった箇所から、都市の「駅前広場」からキャンパスの「構内」までを自身の建築を介して連続した関係を構築しようとする意図が読み

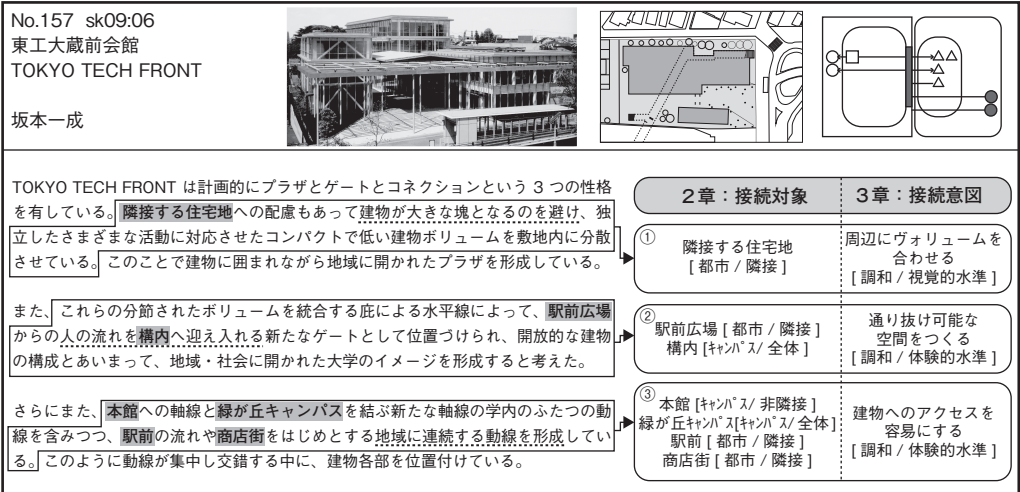


図1 分析例

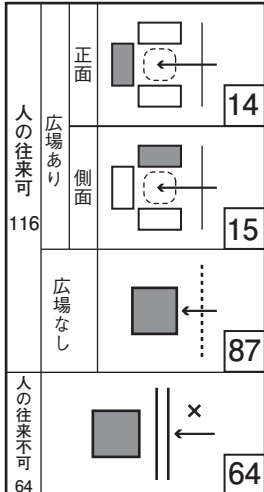


図2 敷地境界の形式

図 3 接続対象の内容

〈対立〉では体験の水準が、相対的に多くみられた。このことから、周辺環境との調和的な関係は外観の同調やヴォリュームの抑制などから構想されるのに対し、対立的な関係は動線の遮断や新しい用途機能の挿入などによって構想される傾向にあるといえる。

4. 大学施設における建築家の領域的思考

4-1. 接続対象と接続意図の関係

前章までの検討を前提として、横軸に接続対象の範囲を、縦軸に接続意図をとり、全資料を位置づけたものが図5である。資料となる言説からは複数の接続対象および接続意図を述べるものがあることから、ここでは資料単位での接続対象の組合せを、【キャンパスのみ】、【都市のみ】、【キャンパス・都市双方】の3つから、接続意図を〈調和〉のみの《調和型》、〈対立〉のみの《対立型》、双方あわせもつ《混在型》の3つからそれぞれ捉えた。その結果、接続意図の組合せでは《調和型》が最も多くみられた(78/129)。このことから、キャンパス、都市に関わらず周辺環境と連続的に関係づけようとする傾向があるといえる。さらに、接続対象の組合せでは【キャンパスのみ】が最も多くみられた(57/129)。このことから、建築家は大学個々の様々な側面との関係性の構築を都市よりも優先する傾向にあるといえる。さらに【キャンパスのみ】の中では、《調和型》において「隣接」の接続対象との関係が示されるものが多い一方で、《対立型》において「全体」の接続対象との関係が示されるものが多いという、対照的な傾向がみられた。このことから、キャンパス内のみとの調和的な関係を構築しようとする場合は、特徴的な様式をもつ建物といった隣接する要素との外観上での一体感

や動線的な連続性によって実現しようとし、対立的な関係を構築しようとする場合は、キャンパスの漠然とした全体に対して自身の建築によって新規性によって実現しようとする傾向を示すものと考えられる。

次に【キャンパス・都市双方】に接続対象を述べる資料に着目する。ここでは、1つの接続意図によってキャンパス、都市双方の接続対象を横断的に関係づけようとするものに着目し、これを『双方横断あり』として分類している。その結果、《調和型》において『双方横断あり』の資料が多くみられ(12/23)、一方で《対立型》においては『双方横断あり』の資料はほとんど見られず、キャンパス、都市に対してそれぞれ個別に接続意図を述べる資料が多かった(6/8)。このことから、キャンパス、都市の双方に対して調和的な関係を構築しようとする場合は、自身の建築がそのハブとなってキャンパスと都市を連続させようとする傾向にあり、それに対して、キャンパス、都市双方に対立的な関係を構築しようとする場合は、それぞれのエリアのもつ問題に対して個別に対処しようとする傾向があるものと考えられる。

4-2. 大学施設における建築家の領域的思考の通時的傾向

次に、接続対象と接続意図との関係を通時的に検討した。その結果、《調和型》において接続対象が【キャンパスのみ】「隣接」の資料は50～70年代のものが多い(8/17)のに対して、接続対象が【都市のみ】の資料は00年代以降のものが集中した(9/19)。また、【キャンパス・都市双方】の資料は設計系の内容に関わりなく、00年代以降のものが多くみられた(20/42)。以上のことから、50～70年代においては隣接す

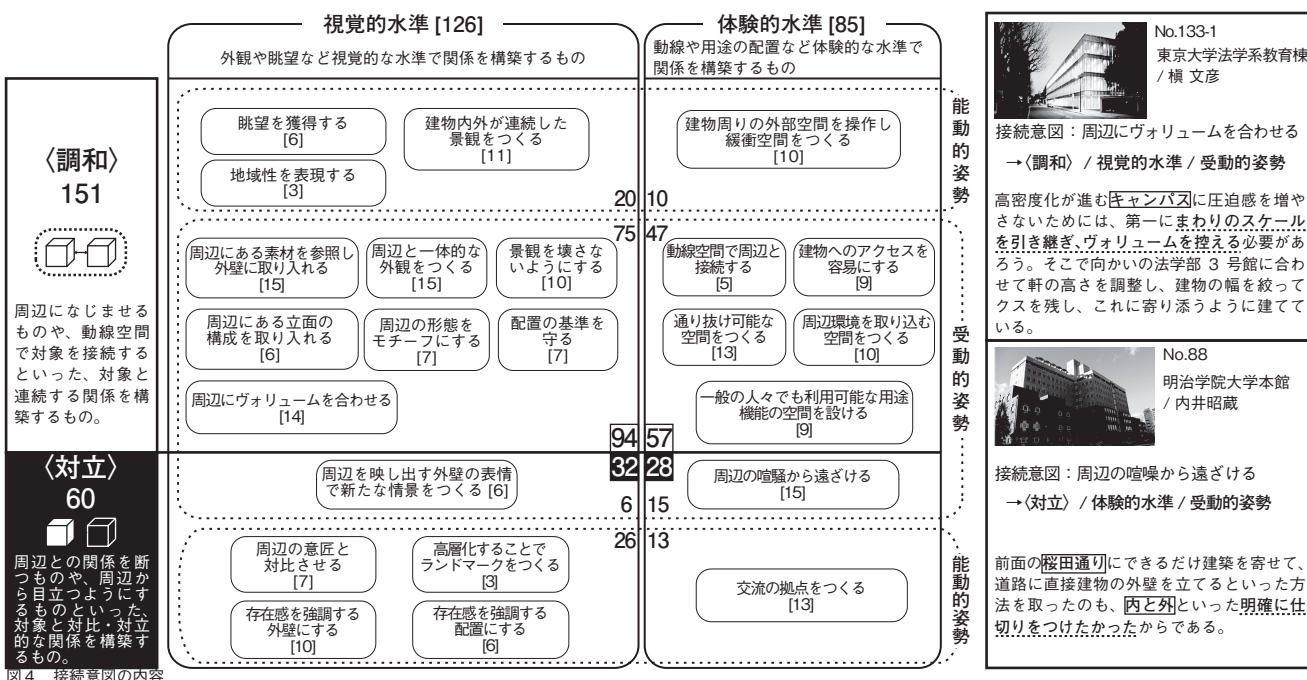


図4 接続意図の内容

る要素との調和という簡潔なキャンパスとの接続対象が定型化していたのに対して、00年以降には都市との接続関係により比重を置かれるようになりつつあるといえる。このことは、開かれた大学として積極的な地域貢献が社会から求められる状況を背景に、建築家の大学施設に対する設計姿勢が変化していることを示すものと考えられる。

5. 結

以上、本研究では都市型大学キャンパスの周縁部に建つ建築作品を資料として、その設計論を接続対象と接続意図から検討した。接続対象ではキャンパスと都市それぞれに属するものがみられ、さらに直接面するもの、直接面しないもの、漠然とした全体像に大別できた。また接続意図は調和的、対立的の2つの関係性から、さらに視覚的水準と体験的水準から捉えることができた。

さらに、接続対象と接続意図との対応関係を検討したところ、

キャンパス内の隣接する対象と調和的な関係を構築する思考、キャンパスの全体像と対立的な関係を構築する思考という対立的な思考形式を見出した。また、キャンパス、都市の双方を横断的に連続させようとする思考、キャンパス、都市それぞれに異なる不連続的な関係を構築しようとする対立的な思考形式を見出した。またこれらの思考に通時的な傾向があることを明らかにした。

註

- 1) 本研究では、都市部に立地する大学キャンパスのうち、同一の敷地内に複数棟の大学施設が建つものを都市型大学キャンパスと定義する。
- 2) 国内の建築誌の中で代表的なもののひとつである「新建築」誌を中心とし、教育基本法のもとで大学の設立・運営が始まった1947年以降発表された都市型大学キャンパスの周縁部に建つ大学施設180作品を資料としている。そのうち、設計論において周辺環境との接続に関する思考が明確に読み取れるものは129作品みられた。

参考文献

- 1) ケヴィン・リンチ・丹下健三・富田玲子 訳：都市のイメージ・岩波書店・2007
- 2) 日本建築学会：いまからのキャンパスづくり・丸善出版社・2011
- 3) 坂本一成：都市共生型—高機能大学キャンパスの再構築計画に関する研究・2004

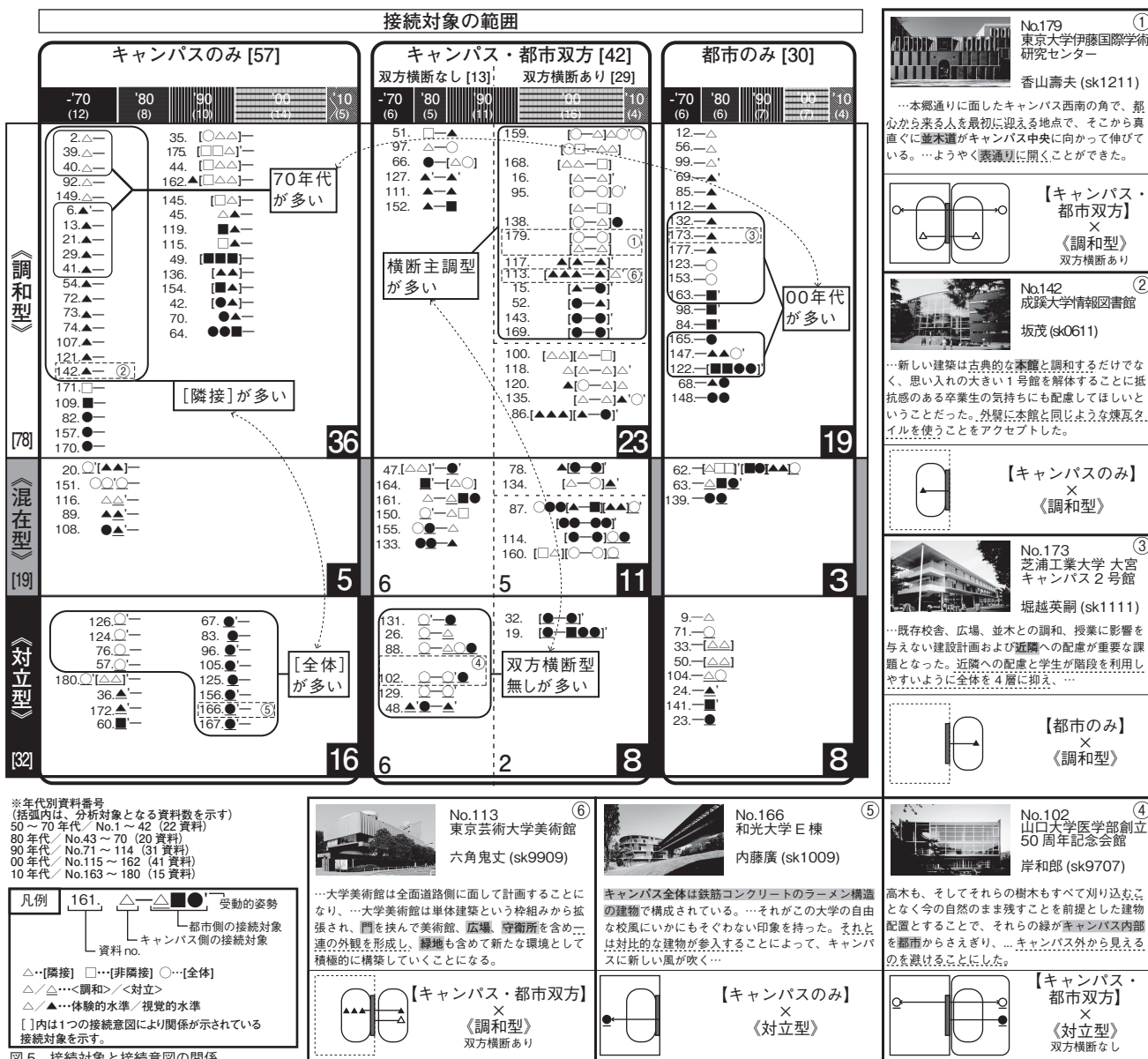


図5 接続対象と接続意図の関係